

# ジャネット・ショウの植民地への旅

志渡岡 理 恵

## 1. はじめに

1774年から1776年にかけてスコットランドから西インド諸島、アメリカへと旅し、ポルトガル経由で帰国したジャネット・ショウ (Janet Schaw) の『ある貴婦人の日記』(*Journal of a Lady of Quality*) は、20世紀になって初めて出版された。友人に宛てた書簡集というかたちをとったこの作品は、1904年、植民地史を専門とする歴史家により大英博物館で発見され、その歴史的意義を認められて1923年に出版される運びとなったのである。ショウが旅の経験を綴っていた1770年代には、出版された女性の旅行記はわずか10作品しか存在しなかった<sup>(1)</sup>。市場に流通していない私的な女性の旅の記録は少なからず存在していたと考えられるものの、当時、女性の旅行記のモデルとして参照できるものはほとんどない状況だった。男性の旅行記がすでに数多く出版されていたのに対し、女性の旅行記の出版数がこれほど少なかったのは、カール・トンプソン (Carl Thompson) が指摘するように、当時の女性には強力な「文化的圧力」(“cultural constraints”) が働いていたからだろう (Thompson 132)。女性が親族や友人の付き添いなしに旅に出掛け始めるのはトマス・クック (Thomas Cook) が旅行会社を立ち上げ、団体旅行を企画する19世紀半ば以降のことであり、1770年代にはまだ旅する女性の数は限られていた。また、18世紀末には女性作家の作品が急速に増え始めたものの、男性作家の数とは比べものにならなかった。女性旅行記がわずかだったこのような時代に、ショウは、歴史の現場でどのような

視点から、どのような言説に依拠し、見聞した事象を解釈し、表象したのだろうか。

この問いに答えるためには、ショウの私的な書簡を、ブリテン史およびブリテン帝国史のコンテクストにおいて読み解くことが必要となる。ブリテン帝国史を初期近代のブリテン史と再統合することを試みたデイヴィッド・アーミテージ (David Armitage) は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、プロテスタントのアイルランド、カリブ海のブリテン領諸島、北米のブリテン領植民地を包摂する政治共同体としての「ブリテン帝国」(“British Empire”) 概念は長い間現れず、早くても17世紀末になって、ようやく形をなしたと論じている (Armitage 7)。アーミテージによれば、ブリテン帝国は、西半球に及ぶ国際貿易の舞台であったため、その特色は商業的ということになる (Armitage 8)。彼は、国家と帝国の融合論により国家形成と帝国建設との関係を明瞭に理解したJ.R. シーリー (Seeley) の第一帝国に関する見解に触れているが、それは、大西洋の向こう岸にあったのは共通の利益で結ばれた有機的な共同体ではなく、本国の利益のために創り出された物質主義的 (=重商主義的) 帝国だった、という主張である (Armitage 18)。

当時のブリテンの人びとにとって西インド諸島やアメリカは利益を生み出す農場にすぎなかったというシーリーの主張は、それらの地を旅したスコットランド出身のショウの認識と一致するのだろうか。彼女の滞在先は、スコットランド移民が形成する共同体だった。家族や親戚、知人が経営する農園では、奴隷制という搾取のシステムに支えられた経済活動が行われていた。スコットランドから一時的な訪問者として訪れた彼女の目に、血縁者や知人が移り住んだ植民地はどのように映ったのだろうか。彼女は、大西洋を横断する船上でハイランド・クリアランスにより土地を追われた移民たちの苦境を目の当たりにし、最初の目的地アンティグアでは農園の滞在客として奴隷制の実態を垣間見る。第二の目的地アメリカでは、独立戦争前夜の高まりつつある反ブリテン感情に晒される。このような帝国建設に伴う搾取と軋轢の場面を次々と目撃し、記録していく彼女のテキスト

の表面に徴候として現れるのは、彼女の政治的意識である。

本稿は、スコットランド出身の中産階級の女性ジャネット・ショウが遺した植民地への旅の記録を読み解き、彼女の政治的意識のありようを詳らかにしていく。ひとりの女性の私的書簡をブリテン史およびブリテン帝国史と重ね合わせながら、「感受性崇拜」(“Cult of sensibility”)の言説、奴隷制をめぐる議論、ジャコバイトの反乱のヒロインであるフローラ・マクドナルド(Flora Macdonald)の自伝などを含む当時の多様なテキストと照らし合わせるにより、彼女のテキストに明示あるいは暗示されている政治的意識を明らかにすることが、本稿の目的である。

## 2. ハイランド移民と感受性崇拜の言説

ジャネット・ショウが大西洋を横断して西インド諸島およびアメリカへ旅することになったのは、家族と親戚の事情による。彼女は、ノースカロライナへ移住した親戚ジョン・ラザフォード(John Rutherford)のもとに彼の娘ファニー(Fanny)と息子2人を送り届ける役割を担っていた。ラザフォードの地所の近くに入植している兄ロバート(Robert)に会うという目的もあった。さらに、セント・キッツに職を得た弟アレクサンダー(Alexander)が同行していたため、ショウはアンティグアで農園を営んでいる知人宅を訪問することにもなっていた。トランスアトランティックなショウ一族の地理的拡がりには、18世紀後半のスコットランドの移民状況を反映している。スコットランドでは、18世紀半ば以降、「人口増加と産業・社会構造の変化から、とくに高地地方を中心に、自発的、あるいは強制的な移民」の数が増していた(松井93)。それに伴い、「海外に赴任中の家族を訪問したり、彼らに同行した女性たちが、軍人や官僚とは異なる立場から現地の生活を記し」た例も少なくなかった(松井95)。ショウはそのような女性たちのひとりだった。

旅に出たショウが最初に出遭うのは、ハイランドからの貧しい移民たちである。船が大西洋に乗り出すと、乗客は自分たちだけと聞かされて

いた彼女は、突然現れた人びとの群れに驚く。船長によれば、彼らは船のオーナーが密航させた移民たちだった。彼女は、彼らを“Never did my eyes behold so wretched, so disgusting a sight. They looked like a Cargo of Dean Swift’s Yahoos newly caught” (Schaw 28) と、『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver’s Travels*, 1726) のヤフーになぞらえ、異質の存在として嫌悪する。

ところが、ほどなくして移民たちの事情を聴き、彼らが“a company of hapless exiles, from the Islands we have just passed, forced by the hand of oppression from their native land” (Schaw 33) であると知ると、ショウの態度は一変する。ヤフーになぞらえられるほど悲惨な状態にあった彼らは、ハイランド・クリアランスの犠牲者だった。カロデンの戦いの後、ブリテン政府は、「ジャコバイトの主力であった彼らハイランダーの帰属意識の核であり、生活基盤でもあるクラン（氏族）を解体し、彼らをハイランドから追放してその土地を没収する、いわゆるハイランド・クリアランスを展開した」(井野瀬76)。さらに、クランを示すタータンの着用禁止やバグパイプの使用禁止などによってハイランド文化の破壊も進み、それがアメリカ移民に拍車をかけた。1760年から1775年の間に北米に移民したスコットランド人は4万人強で、「その大半が新天地を求める貧しいハイランダーたちだった」(井野瀬77)。

荒涼とした不毛の土地にしか見えないハイランドの景色を愛おしそうに見つめ、無言のまま涙を流す移民たちの姿を目の当たりにして、ショウは、“How differently did the same sight affect them and me?” (Schaw 33) と驚き、彼らを追放した地主に対し、次のように呼びかける。

Hard-hearted, little Tyrant of yonder rough domains, could you have remained unmoved, had you beheld the victims of your avarice, as I have done, with souls free from guilt, yet suffering all the pangs of banished villeins; oh! had you seen them, their hands clasped in silent and unutterable anguish, their streaming eyes raised to heaven in mute ejaculations, calling down blessings, and pouring the last benedictions of a broken heart on the dear soil that gave

them being; perhaps even a prayer for the cruel Author of all their woes mixed in this pious moment. (Schaw 34)

ここで描き出されるのは、不当な仕打ちを受けながらも、恨みや怒りの感情は表さずに、ただひたすら悲しみ、故郷を懐かしむ、敬虔な「苦境にある美德の人」(“virtue in distress”)としての移民たちである<sup>(2)</sup>。そして、それを見て共感・同情するショウ自身である。さらに、書き手ショウの意識には、それを理解してくれるはずの美德を備えた読み手の存在がある。

この一節の背景には、当時の「感受性崇拜」の現象があると考えられる。ジョン・ミュラン (John Mullan) によれば、タイトルページに「センチメンタル・ノヴェル (A Sentimental Novel)」と冠された小説が、1770年代から1780年代にかけて数多く刊行された (Mullan 236)。センチメンタル・ノヴェルは、感受性を描き、読者の感受性に訴えかけるもので、「センチメンタル」という言葉が具体的に意味するのは“a readiness to be touched (particularly by others' distress), to display tender feelings, to be susceptible to sympathy” (Mullan 238) である。ショウは、心の中で起きた変化を“Where are now the Cargo of Yahoos? They are transformed into a Company of most respectable sufferers, whom it is both my duty and inclination to comfort, and do all in my power to alleviate their misfortunes, which have not sprung from their guilt or folly, but from the guilt and folly of others” (Schaw 36) と説明するが、感受性豊かな語り手が偶然出遭った社会的弱者から身の上話を聞いて同情を示すという一連の行為は、センチメンタル・ノヴェルで幾度となく繰り返される。ローレンス・スターン (Lawrence Stern) の『センチメンタル・ジャーニー』(A Sentimental Journey, 1768) の成功をきっかけにセンチメンタル・ノヴェルが流行したと論ずるミュランは、“A Sentimental Journey provided a narrator who was ready to be touched by the humble sufferings of those whose stories travel writers would usually never hear” (Mullan 239) と、『センチメンタル・ジャーニー』の特徴のひとつとして、社会的弱者の話に耳を傾ける語り手を挙げている。ショウは、ハイランド移民との遭遇のエピソードを、

このセンチメンタル・ノヴェルの枠組みを用いて描出している。

このように、不当な扱いを受けた犠牲者の苦しみを代弁・表象して読者の感受性に訴えるという行為は、当然のことながらその苦しみの原因である暴君への批判を含んでいて、政治的な意味合いを持つ。ショウは、ハイランド移民の苦境の原因が彼らを追放した地主の利己心であることをセンチメンタル・ノヴェルの作法に倣いながら明らかにし、地主の無慈悲な振る舞いを効果的に強調する。このレトリックの根底にあるのは、個人が自己の利益ばかりを考えずに他者に寄り添い、個人と個人が感情を共有してつながり、有機的な社会を形成していくという理想である。それは、アダム・スミス（Adam Smith）やデイヴィッド・ヒューム（David Hume）ら18世紀スコットランド道徳哲学者たちが理論化を試みた思想でもある。

It is no coincidence that the moral philosophers who were the contemporaries of Richardson, Sterne, and Mackenzie produced complex analyses of “moral sentiments” (Adam Smith’s major work of moral philosophy, published in 1759, is indeed called *The Theory of Moral Sentiments*), Hume and Smith, in particular, set out to describe the properties of “sympathy,” the faculty by which “the passions and sentiments of others” become our own. (Mullan 249)

ハイランド移民の苦しみに共感・同情し、彼らに寄り添うショウは、「道徳感情」(“moral sentiments”) を十分に備えているように見える。しかし、アンティグアに到着し、奴隷制の実態を目撃した彼女は、黒人奴隷に対しては異なる反応を示すのである。

### 3. アンティグアのスコットランド移民共同体と奴隷制

前節では、ジャネット・ショウがハイランド移民たちとの遭遇をセンチメンタル・ノヴェルの枠組みを用いて描いていることを明らかにした。彼らがブリテン政府の意向を受けた地主たちにより虐げられていることに怒

りと悲しみを露わにした彼女は、黒人奴隷に対してはどのような態度を示すのだろうか。本節では、彼女の西インド諸島滞在記において奴隷制がどのように表象されているのかを確認したい。

当時ヨーロッパ諸国が植民地獲得に乗り出していた西インド諸島は、さまざまな国の人びとが忙しく交易する多言語空間だった。彼女は、その様子を次のように表現している。

But never did I meet with such variety; here was a merch<sup>l</sup> vending his goods in Dutch, another in French, a third in Spanish, etc. etc. They all wear the habit of their country, and the diversity is really amusing. The first that welcomed us ashore were a set of Jews. As I had never seen a Jew in his habit, except Mr Diggs in the character of Shylock, I could not look on the wretches without shuddering. (Schaw 136)

オランダ、フランス、スペインといったヨーロッパ諸国の商人たちの衣服の多様性を楽しみながら、初めて見るユダヤ人に身震いする彼女はまた、フランスとスペインにおいて無実の罪で拷問を受け体に大きな傷を負った2人の男性に出会い、「キリスト教の残酷さ」(“Christian cruelty”)の最悪の表れを目の当たりにして愕然とする (Schaw 136)。

このような非日常空間における新奇な経験とそれによって生じた感情を記録しながら、ショウは心のよりどころを西インド諸島に形成されているスコットランド移民共同体に求める。アンティグアの農園経営者である知人宅に滞在する彼女は、“Here was a whole company of Scotch people, our language, our manners, our circle of friends and connections, all the same”と、「わたしたちの」という言葉を繰り返し用いて帰属意識を示し、安堵の気持ちを表している (Schaw 81)。見知らぬ地で一層高まったと思われるスコットランドへの帰属意識は、彼女の奴隷制に対する態度に少なからぬ影響を与えたようである。

ショウの奴隷制へのまなざしは、農園経営者の帝国主義的な視線と重な

る。ラザフォードの親戚にあたるパトリック・マルコム (Patrick Malcolm) の農園を訪問した彼女は、マーティン (Martin) という人物について語る。マーティン家はアンティグアで最も古い一族のひとつで、マーティンの経営する農園では奴隷の待遇が良く、奴隷同士の子どもが生まれるため、20年以上奴隷を買ったことがないと言われている。農園主たちのネットワークの中で歓待を受けるショウは、農園主を“a kind and beneficent Master, not a harsh and unreasonable Tyrant”と評し、奴隷たちを“Well fed, well supported, they appear the subjects of a good prince, not the slaves of a planter”と描写する (Schaw 104)。それは、農園主と奴隷の関係を「慈悲深い主人と感謝する奴隷」というレトリックで語る農園主たちの視点を内面化しているようである。

このように奴隷制の非人間性を直視しない態度はショウのテキストに散見されるが、一見滑らかなその表面に亀裂を走らせるものが浮上する瞬間がある。彼女は、鞭打ちが禁止されているクリスマス・シーズンに市場に物を売りに行く奴隷たちを“the Negroes in joyful troops on the way to town with their Merchandize”と表現し、“It was one of the most beautiful sights I ever saw” (Schaw 108) と、絵画を眺めているかのような感想をもらす一方で、“It is necessary however to keep a look out during this season of unbound freedom; and every man on the Island is in arms and patrols go all round the different plantations as well as keep guard in the town. They are an excellent disciplined Militia and make a very military appearance” (Schaw 109) と、島中で奴隷たちの反乱への警戒がなされている事実を記している。1780年代の西インド諸島では、小さな島まで入れた全体の人口は約54万人で、そのうち黒人は45万5000人、白人は6万5300人、混血は2万人であった (Bohls 51)。圧倒的多数を占める黒人の反乱が白人にとって常に大きな脅威だったことは想像に難くない。この一節から露わになるのは、農園主と奴隷の関係を「慈悲深い主人と感謝する奴隷」の構図で語るショウの心底に潜む奴隷制に対する真の認識である。

しかし、ショウはその認識を明言することを回避する。たとえば、彼女

は奴隷の身体に刻まれた鞭打ちの傷跡を目撃しながら、黒人が鞭打ちによって傷つけられるのは肉体のみであり、心に傷は負わないから、鞭打ちはヨーロッパの人間が想像するほど恐ろしいものではないと言う。

When one comes to be better acquainted with the nature of the negroes, the horror of it must wear off. It is the suffering of the human mind that constitutes the greatest misery of punishment, but with them it is merely corporeal. As to the brutes it inflicts no wound on their mind, whose Natures seem made to bear it, and whose sufferings are not attended with shame or pain beyond the present moment. (Schaw 127)

エリザベス・ボールズ (Elizabeth Bohls) が指摘するように、ショウは、目に見える苦痛の証拠から解釈をそらせて、目に見えない精神的な相違についての主張へと逃げこんでおり、奴隷制の目に見える証拠を提示すると同時に隠蔽していると言えるだろう (Bohls 56)。

女性の旅行記と美学の関係を論じたボールズによれば、18世紀から19世紀初頭にかけて、植民地プランテーション文化を正当化するために美学の文化権力を活用しながら西インド諸島について書いた著述は、男女ともにさまざまな種類のものがあつた。ボールズは、ショウの旅行記をその代表的なものとして位置づけながらも、彼女のテキストは、西インド諸島のジェンダー・システムをより深く掘り下げている点で、これらの他のテキストとはかなり異なっていると評価している。つまり、そこには、西インド諸島のジェンダー・システムと、美的対象としての女性の文化的地位とをそれとなく批判する両義的な態度が、奴隷制への無批判な現状肯定と共存しているというのである (Bohls 47)。

ボールズの指摘の多くは説得力に富むものの、疑問を感じさせる部分もある。確かにショウはアンティグアにおいてアウトサイダーであり、西インド諸島のレディの制約されたジェンダー役割からある程度解放されていると言える。彼女は未婚で、「家」を離れて旅する女性である。しかしショ

ウは、アンティグアの白人女性が“excellent wives, fond attentive mothers and the best housewives”であり、“modest, genteel, reserved and temperate” (Schaw 113) であると、当時のジェンダー規範をなぞるかたちで褒め称えている。ボールズは、ショウがアンティグアの女性の肌の白さと自らの日焼けした肌を比較する一節に、慣習的な女らしさへのあからさまなオマージュと、それに対する明言されない抵抗感との間の不安定な緊張感や、島のジェンダー・システムに対して目覚めかけた批判を読み取るが (Bohls 63)、ショウのアンティグア滞在記には、ジェンダー・システムを掘り下げたり、それとなく批判したりする姿勢はほとんど見られない。

さらにボールズは、ショウの日焼けした顔は、彼女が見下しかつ恐れる奴隷の皮膚の色に彼女を近づけ、女性の抑圧と西インド諸島の奴隷の抑圧との間のつながりが暗示されると分析するが (Bohls 65)、ショウの人種の捉え方は、鞭打ちの箇所では明らかなように、多起源説を唱える生物学的な決定論者の言説に依拠している。アンティグアを去る直前、彼女はアンティグアの白人男性と黒人女性の性的関係に言及し、批判の矛先を黒人女性に向ける。

The young black wenches lay themselves out for white lovers, in which they are but too successful. This prevents their marrying with their natural mates, and hence a spurious and degenerate breed, neither so fit for the field, nor indeed any work, as the true bred Negro. Besides these wenches become licentious and insolent past all bearing, and as even a mulatto child interrupts their pleasures and is troublesome, they have certain herbs and medicines, that free them from such an incumbrance, but which seldom fails to cut short their own lives, as well as that of their offspring. By this many of them perish every year. (Schaw 112-13)

苦境にあるハイランド移民に対しては惜しめない共感・同情を表したショウが黒人を家畜のように語るのは、黒人と白人は別の生物であると考えて

いるからである。このようにアンティグアの農園主のネットワークの中で帝国主義的な発言を繰り返すショウは、独立前夜のアメリカではどのような振る舞いを見せるのだろうか。

#### 4. 独立前夜のアメリカ

アンティグアを出航したショウは1775年2月14日、ブランズウィックに到着し、兄の所有する農園へ向かう。彼女は旅に出る前、アメリカに関する出版物にはすべて目を通していたようで、“I think I have read all the descriptions that have been published of America, yet meet every moment with something I never read or heard of”と述べている(Schaw 151)。この記述から、ショウがスコットランドでアメリカに関する書物や記事にアクセスできる環境にあったこと、彼女が兄弟や親戚の移住地アメリカに強い関心を抱いていたこと、そして渡米して、実際に足を運ばなければその地の真の状況は分からないと認識したことが分かる。

ショウのアメリカ滞在記から見えてくるのは、彼女が自らをブリテン臣民と規定し、アメリカに対するブリテンの優越性を示そうとする態度である。彼女は、アメリカに移住してきた男性と女性の違いに驚いたと述べた後で、アメリカに長く住む分別のある男性から次のような説明を受けたと述べている。

In the infancy of this province, said he, many families from Britain came over, and of these the wives and daughters were people of education. The mothers took the care of the girls, they were train'd up under them, and not only instructed in the family duties necessary to the sex, but in those accomplishments and genteel manners that are still so visible amongst them, and this descended from Mother to daughter. As the father found the labours from boys necessary to him, he led them therefore to the woods, and taught the sturdy lad to glory in the stroke he could give with his Ax, in the trees he

felled, and the deer he shot; to conjure the wolf, and the bear and the Alligator; and to guard his habitation from Indian inroads was most justly his pride, and he had reason to boast of it. (Schaw 154-55)

ブリテンから移住してきた多くの一家の女性たちは、ブリテンの女性の理想像を母から娘へと受け継いでいった。一方、男性たちは開拓するのに労働力が必要だったため、息子たちにその仕事を教え、それに秀でることを奨励した。その結果、女性たちはブリテン的要素を保持し、男性たちは新しい生活スタイルを獲得していったということである。ショウが同胞意識を示すのはブリテン的要素を保持する女性たちであり、それは彼女が自らをブリテンの臣民と認識しているからだと考えられる。

しかし、一方でショウは、アメリカでブリテン臣民として振る舞う自分を客観視し、自嘲する態度も見せる。たとえば、招待された舞踏会にブリテン式衣装で出掛けたショウは、場違いな自分を次のように戯画化している。

Let it suffice to say that a ball we had, where were dresses, dancing and ceremonies laughable enough, but there was no object on which my own ridicule fixed equal to myself and the figure I made, dressed out in all my British airs with a high head and a hoop and trudging thro' the unpaved streets in embroidered shoes by the light of a lantern carried by a black wench half naked. (Schaw 154)

ショウは、アメリカの舞踏会を見下して嘲笑すると同時に、その中で最も馬鹿げていたのは自分だったと冗談めかして告白している。ここには、文化も環境も異なる場所で状況を鑑みず、ブリテン式の衣装で着飾って出掛けた自分の非合理性と滑稽さを冷静に見つめる視線がある。

ショウはまた、兄夫婦の描写をする際にも両義的な態度を見せる。兄ロバートは、少年の頃にブリテンを出て商人となり、何年も働いてようやく

アメリカの農園主となった。妻はアメリカ人である。

He left Britain while he was a boy, and was many years in trade before he turned planter, and had lost the remembrance what he had indeed little opportunity of studying, I mean farming. His brother easily convinced him of the superiority of our manner of carrying on our agriculture, but Mrs Schaw was shocked at the mention of our manuring the ground, and declared she never would eat corn that grew thro' dirt. Indeed she is so rooted an American, that she detests everything that is European, yet she is a most excellent wife and a fond mother. Her dairy and her garden show her industry, tho' even there she is an American. (Schaw 160-61)

ショウはブリテン式農業の優越性を当然視しているが、ここで注目したいのは、アメリカ人の義姉についてのコメントである。良妻賢母として賞賛している点は西インド諸島の白人女性の場合と同じであるものの、ショウは、西インド諸島の白人女性については慎まじやかで控えめと評したのに対し、アメリカ人の義姉については自分の意見を明言して譲らない強さと勤勉さを兼ね備えた女性として、批判と賞賛の入り混じった微妙な表現をしている。

ショウの家族や親族のように、植民地で農園経営者、商人、軍人、行政官となったスコットランド人はかなりの数に上った。井野瀬は、「貿易、軍隊、植民地行政—帝国建設の不可欠な部分に登場しはじめたスコットランド人にとって、アメリカ独立戦争は、連合王国への忠誠を示す絶好の機会となったと思われる」と指摘している（井野瀬86）。ジャコバイトの反乱でプリンス・チャーリーをフランスへ亡命させる手助けをしたフローラ・マクドナルド（投獄されたが、1747年にロンドン塔から恩赦で釈放され、スカイ島に戻り、同族の婚約者アランと結婚）と夫アラン、2人の息子、結婚した長女一家も、サウスカロライナとの境界にほど近いノースカロライナ内陸部のクロス・クリーク（現フェイエットヴィル）で細々と営まれ

ていたハイランダー入植地に移民し、大歓迎を受けた（井野瀬75-77）。これはショウがアメリカに降り立ったのと同じ頃の出来事である。

フローラ・マクドナルドたちの移住も経済的理由によるものだった。彼女は孫娘が編集した自伝の中で、アメリカへ移住することになった経緯を次のように語っている。

In 1775 my husband put in practice a plan he and I had often talked over – that of joining the emigrants who were leaving their native hills, to better their fortunes on the other side of the Atlantic.

We were induced to favour this scheme, more particularly as a succession of failures of the crops, and unforeseen family expenses, rather cramped our small income. (Macdonald 135)

さらに彼女は、“So after making various domestic arrangements, one of which was to settle our dear boy Johnnie under the care of a kind friend, Sir Alexander M’kenzie of Delvin, near Dunkeld, until he was of age for an India appointment, we took ship for North America”と、息子ジョニーは将来インドで仕事に就く予定であると述べている（Macdonald 135）。この短い言及からも、アメリカやインドをはじめとする植民地が当時の人びとにとってどのような場になっていたのかがうかがえる。

ノースカロライナに地所を購入して間もなくアメリカ独立戦争が勃発すると、フローラの夫アランは、「ロイヤル・ハイランド移民部隊」という義勇軍を結成し、王党派の立場を貫いた。この時フローラの名声は兵士のリクルートに大きく貢献したと言われている（井野瀬77）。フローラ・マクドナルドは、当時の状況を次のように振り返っている。

On reaching North Carolina, Allan soon purchased and settled upon an estate, but our tranquility was ere long broken up by the disturbed state of the country; and my husband took an active part in that dreadful War of Independence.

The Highlanders were now as forward in evincing attachment to the British Government as they had furiously opposed it in former years. (Macdonald 136)

「ハイランドの人びとは、以前ブリテン政府に猛烈に反抗したのと同じくらい熱烈に、今度はブリテン政府へ忠誠を示した」という彼女の証言からは、ジャコバイトの反乱から30年ほどの時を経て、ハイランドの人びとさえもが自己をブリテンの臣民と規定して植民地で新たな生活を始めていたことがうかがえる。アメリカが独立すると、扇動罪で弾劾されて財産をすべて没収されたフローラ・マクドナルドは、1780年、娘や孫たちとともに故郷スカイ島に戻った。

ジャネット・ショウとフローラ・マクドナルドはともに、ブリテン政府のハイランドの人びとへの仕打ちに激しい憤りを感じながらも、植民地ではブリテンの臣民として振る舞った。この2人のスコットランド女性は、時代の波に乗りブリテン臣民として生きていく選択をした、あるいはそうせざるをえなかったということだろうか。

## 5. おわりに

これまでショウの旅行記をブリテン史およびブリテン帝国史と重ね合わせながら読み解いてきた。彼女の旅の記録を読み進めていくと、故郷スコットランドを離れ、植民地でスコットランド移民共同体の中で過ごすにつれ、彼女のブリテン臣民としての意識が高まっていく様子を読み取れた。船上ではハイランド・クリアランスにより土地を追われたハイランド移民たちの姿を見て憤りを露わにしたショウが、アンティグアでは奴隷制の実態を目撃しながらも、帝国主義的な詭弁を弄し、奴隷制を容認する態度を示した。そしてアメリカでは、高まりつつある反ブリテン感情に晒され、総督は手ぬるいと不満をもらした後、“...but I am no politician, as yet at least, tho’ I believe I will grow one in time, as I am beginning to pay a good deal of attention

to what is going on about me” (Schaw 157) と、自らの政治的意識の高まりを自覚している。ショウの植民地への旅の記録は、移動と歴史の現場での見聞が彼女の意識にどのような影響を及ぼしたのかをリアルに伝える力を持っている。

ハイランド移民への共感・同情から喚起された反ブリテン感情、帝国建設の一翼を担うスコットランド移民共同体の一員として奴隷制を容認する帝国主義的な態度、アメリカの生活様式を嘲笑してブリテンの優越性を主張しながらも、そんな自分を戯画化する冷めた視線。それぞれの地におけるこれらのショウの反応から見えてくるのは、目まぐるしく変わる政治状況のなかで揺れ動く流動的な彼女のナショナル・アイデンティティである。

#### 注

- (1) 2014年7月にチョウトン・ハウス・ライブラリ (Chawton House Library) で開催された女性の旅行記を再評価する学会「新たな地平——1660年から1900年までの女性の旅行記を再評価する」(“New Horizons: Reassessing Women’s Travel Writing, 1660-1900”) を契機に開始されたオンラインのデータベース *DWTW (A Database of Women’s Travel Writing, 1780-1840)* は、1780年から1840年の間にブリテンとアイルランドで出版された女性の旅行記204作品すべての書誌情報を提供している。学術誌『ウィメンズ・ライティング』(*Women’s Writing*) は、2017年第24巻第2号で女性の旅行記の特集を組み、その巻頭論文“British Women’s Travel Writing, 1780-1840: Bibliographical Reflections”で、ベンジャミン・コルベール (Benjamin Colbert) は、自らが構築したこのデータベースの分析を行っている。コルベールによれば、女性の旅行記は、18世紀末から19世紀前半にかけて、年々数を増やしながら定期的な出版され始めた (Colbert 153)。最初の作品は、1691年に出版されたマリー＝キャサリン・ドヌワ (Marie-Catherine d’Aulnoy) のスペイン旅行記で、2番目が1739年出版のエリザベス・ジャスティス (Elizabeth Justice) のロシア旅行記、3番目がレイディ・マーガレット・ペニマン (Lady Margaret Pennyman) のフランス旅行記、その後、著名なメアリ・モンタギュ (Mary Montagu) の『トルコ書簡』(*Turkish Embassy Letters*, 1763) が続き、1770年代には6作品が刊行された (Colbert 165-66)。

- (2) 「苦境にある美德の人」(“virtue in distress”) については、R.F. Brissenden, *Virtue in Distress: Studies in the Novel of Sentiment from Richardson to Sade* (Macmillan, 1974) 参照。

\* 本稿の一部は、2011年5月に小倉リーセントホテルで開催された日本ジョーンソン協会第44回大会シンポジウム「涙と冒険のカリブ——西インド諸島と18世紀英文学の諸相」(講師：久野陽一、服部典之、末廣幹、志渡岡理恵) における発表「女性の西インド諸島旅行記における奴隷制」に基づいている。

#### 主要参考文献

- Armitage, David. *The Ideological Origins of the British Empire*. Cambridge UP, 2000.
- Barker-Benfield, G.J..*The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain*. U of Chicago P, 1992.
- Bohls, Elizabeth. *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics, 1716-1818*. Cambridge UP, 1995.
- Brissenden, R.F. *Virtue in Distress: Studies in the Novel of Sentiment from Richardson to Sade*. Macmillan, 1974.
- Colbert, Benjamin. “British Women’s Travel Writing, 1780-1840: Bibliographical Reflections”, *Women’s Writing*. 24: 2 (2017), pp.151-69.
- Coleman, Deirdre. “Janet Schaw and the Complexions of Empire”, *Eighteenth-Century Studies*. 36:2 (2003), pp169-193.
- Ellis Markman. *The Politics of Sensibility: Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel*. Cambridge UP, 1996.
- Gikandi, Simon. *Slavery and the Culture of Taste*. Princeton UP, 2011.
- Macdonald, Flora. *The Autobiography of Flora M’Donald; Being the Home Life of a Heroine, Edited by Her Grand-Daughter, in Two Volumes*. Vol.II. Second Edition. William P. Nimmo, 1870: The British Library, 2010.
- Mallipeddi, Ramesh. *Spectacular Suffering: Writing Slavery in the Eighteenth-Century British Atlantic*. U of Virginia P, 2016.
- Mullan, John. “Sentimental novels” in *The Cambridge Companion to the Eighteenth-century Novel*. Cambridge UP, 1996.
- Schaw, Janet. *Journal of a Lady of Quality*. U of Nebraska P, 2005.
- Seeley, J. R..*The Expansion of England*. U of Chicago P, 1971.

Thompson, C., “Journeys to Authority: Reassessing Women’s Early Travel Writing, 1763-1862”, *Women’s Writing*. 24: 2 (2017), pp131-50.

Wheeler, Roxann. *The Complexion of Race: Categories of Difference in Eighteenth-Century British Culture*. U of Pennsylvania P, 2000.

井野瀬久美恵『大英帝国という経験』講談社，2007.

松井優子「異郷に故郷を重ねて——スコットランドと旅のレトリック」，窪田憲子・木下卓・久守和子編著『旅にとり憑かれたイギリス人——トラヴェルライティングを読む』ミネルヴァ書房，2016.